



原画展にて(2009年4月)

絵本を通して子どもたちに人権について考えてもらおうと、大阪市教育委員会は毎年、「はーと&はーと」絵本原作コンクールを行っている。今回の第11回には、248編の作品が寄せられ、優秀賞には『ケン太のこと』(ひさきあゆみ作)が選ばれた。これに作画したなかむらまさあきさん(51)は、教壇と農園にも立つ絵本作家だ。

大きな賞を励みに創作活動

大学では漫画を専攻し、デッサンやクロッキーなど美術の基本を学ぶ。卒業後は絵本に転向、友人とのグループ展や個展を開いてきた。1993年にはボローニャ国際絵本原画展で「ILLUSTRATORS OF THE YEAR」を受賞。世界の18人の1人に選ばれた。

賞の副賞として、18人の作家による世界の民話集で日本の民話「三枚のお札」の作画を担当。ユニセフにより世界各国で出版された。「描いていていい作品ができるとニンマリする。それで片付けてしまっただけは単なる自己満足。飾りたい、見てほしい、絵本になってほしいと思う気持ちを実現できた」

以降も同展に出展を続けているのは「大人の邪念ではなく、子どもの直感で選ばれる素晴らしい展覧会」であり、また「原画をすごく大事にしてくれる」から。1冊16ページの作品として完成させ、そのうちの5カットを送る。たとえ受賞できなくても、どの絵も大切な作品だ。

絵本制作の機会に感謝

画風はファンタジックで、魔女や鬼が出てくる作品が多い。人間でもデフォルメして描くのが主流だが、今回初めて、リアルな小学生が主人公の絵本『ケン太のこと』を作画することになった。やんちゃなケン太の外面ではなく内面に目を向け、心の優しさに気付く女の子のお話だ。

「まずはケン太のイメージを固めることから取り掛かった」。周囲に意見を求めたが、結果として原作者のイメージを基に、自分のイメージを足していった。「写実的になるのもいや。かといって子どもをデフォルメしてしまうとおばけになってしまう。その接点で描いていった」
 どんな作品でも、柔らかくて優しい、ユーモラスな絵をめざす。今作ではグラデーションの色合いを重視し、「例えば黒板ひとつでも緑一色ではない」。能面の眉毛を描く面相筆を使って、線と線を重ねて濃淡を出していった。時間もタイトで苦労したが、「絵本という形になり、本当に嬉しいこと」と喜ぶ。

3つの顔で人生充実

大きな賞を受賞した実力派ではあるが、絵本制作の機会はそのようない。「個人では、財力や流通経路がないと難しい」という。ならば表現する場を求めている人たちと力を合わせようと、サイト「おはなしポトフ」を立ち上げた。絵本や詩、音楽、書などの作品を持ち寄って、合評したり出版したりする企画である。また、読み聞かせ活動のネットワーク作りも行ってきた。

これらの活動は生活の一部だ。本業は中学校教諭で、美術の授業や障がいのある生徒の在籍する学級を受け持つ。また、京都市のど真ん中で生まれ育っただけに農作業への興味が募り、とうとう貸し農園で野菜づくりに取り組むようになった。「トラクターも買って、今年は大根が2,000本育った。でも出荷の当てもなくて途方に暮れている」と苦笑する顔が誇らしげだ。

「教師、絵本作家、農夫、3つの顔を持つことは『生きる理由』と位置付ける。家族の理解と支えに感謝し、今後も3本柱で自己実現をめざしていく。

(文・江中咲紀 / 写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

教師＋絵本作家＋農業 生きる理由

プロフィール

絵本作家

なかむら
まさあきさん



(絵本「ちごて ええねん」より)

1957年、京都市生まれ。大学卒業後、京都市立中学校教諭。93年「ボローニャ国際絵本原画展」で「ILLUSTRATORS OF THE YEAR」受賞。94年「第11回ニッサン童話と絵本のグランプリ」入賞。97年にユニセフが出版した「世界の民話集」で日本の民話の作画を担当。ホームページ
http://www.geocities.jp/n_ma1/

「はーと&はーと」絵本 原画展開催 (P22参照)